

『世界でたったひとりの生意気な花嫁』

著：森本あき

ill：明神 翼

「ところで、コーヒー全部飲んだ？」

「あ、飲んだ。うまかった。ありがとう」

「ふーん、そっかそっか」

友紀がにやりと笑った。

…ん？

「おまえさ、いまからでもこのバイト辞めるつもりない？」

「ないよ」

こんないい部屋に住めて、三食ついて、パソコンいじり放題で、一日に一時間しか仕事の義務がなくて、終わったら就職したかったところに入れる。バイト代は百万円。

だれが、そんな好条件なバイトを辞めようと思うわけ？

「そっか。残念だな」

友紀が肩をすくめる。

「俺さ、強硬手段を取るのって好きじゃないんだよ」

「え、そうなんだ？」

どう考えても強硬手段を取りそうな気がする。

「俺に興味のない女を無理やりふりむかせるとか、そういうムダな時間は一切使いたくない。そんなことしなくても、寄ってくる女はいくらでもいるわけだし。流れに逆らわないでいるのが楽でいい」

だろうな。かっこよくて金持ちって最強カードだ。

「かといって、一ヶ月もここに軟禁状態なのもいやだ。俺は自由に生きたい」

「自由に生きてるんだろ」

だから、おソノさんがあきれて、詩を連れてきた。

「これからもずっと、だ。俺はばあちゃんの言ったことをよくよく考えてみたんだよ。おまえがダメなら、これから一生、遊んで暮らしてていい、ってことじゃん？」

そうだった？ まあ、そんな感じのことは言っていた。

一ヶ月がんばってみてもダメなら友紀の生き方に口出さないし、親からも守ってあげる、みたいな。

「家のための結婚って、わけわかんない。おまえ、そういうのしたい？」

「残念ながら、俺は大金持ちの息子じゃないから好きに結婚相手を選べるんだ」

「つまり、俺と結婚するつもりはないんだろ？」

もちろん、と言いかけて、思いとどまる。

結婚するつもりはないけれど、骨抜きにして無慈悲に捨てる野望はある。

売られた喧嘩は買う。

それはまったく変わらない。いま普通に話しているのは、コーヒーを持ってきてくれたのと、仕事の一環だからだ。

おまえの失礼な言動は忘れてないぞ！

とはいえ、敵対心むきだしたと相手も敵対心を出してくる。人の感情って鏡みたいなもので、こっちが親切なら向こうも親切に、こっちが意地悪なら向こうも意地悪になりがちだ。みんながみんな、そうじゃないけれど、そういう面のが大きいと思っている。

つまり、ここで肯定してしまうと、じゃあ、俺も結婚するつもりはないからどうでもいいか、と友紀が思うことになる。詩のことは、一ヶ月毎日一時間ほど話せばいい相手で、それが終わればなんの関係もなくなる人、と認識するだろう。

そうすると興味を持ってもらえない。恋をさせる計画が | 暗《あん》 | 礁《しょう》に乗り上げる。

どうやったら恋をさせるのかをじっくり考える前にすべてが終わる。

そんなのいやだ。

売られた喧嘩はきっちり買って、その喧嘩には勝ちたい。

「それは、いまはなんとも言えない。友紀、ちょっとおソノさんに似てるし、俺、おソノさんのことは好きだから、おまえのことを好きにならないともかぎらない。そのための一ヶ月だろ。おたがいに歩み寄る努力をしよう」

ここはひとまず | 下《した》 | 手《て》に出よう。

「やだね」

友紀が、ふん、と鼻を鳴らした。

「一ヶ月もこんなバカなことにつきあわされるとか、ホントに冗談じゃねえんだよ。そこで、賢い俺はひらめいたんだ。おまえに逃げ出させればいい」

「は？」

詩は | 眉《み》 | 間《けん》に皺を寄せる。

こいつ、バカなのか？　なんで、俺が逃げるんだ。

「ばあちゃんは百万だったけど、俺は二億出す。生涯年収ってやつ？　だっけ？」

二億？　バカだろ。だれが他人にそんな大金を出すんだ。

あと、お金持ちが生涯年収という言葉を知らないことはわかった。これはお金持ちとかじゃなく友紀の問題かもしれない。

「日本の会社員が生涯稼ぐ金額が二億ぐらいって話だから、その二億を出す。ばあちゃんが紹介したところに入社できないとしても、それだけの金があれば来年とかにもっといいところを探して入れればいい。そのために必要な資格とか、金があればいくらでも取れる」

ちゃんと考えてた。それに詩はびっくりする。

「だから、ばあちゃんが温泉から帰ってくる前にいなくなってくれ。どうせ、おまえの住所とか

も知らないんだろ？ ばあちゃんは | 執《しつ》 | 拗《よう》に追う人じゃないから、逃げたのかい、がっかりだ、ぐらいで忘れるよ」

おソノさんなら、たぶん、そうだろう。

だけど。

「いやだっつってんの」

二億があまりにも大きな金額すぎて、まったく実感がない。もらえるならほしい、と軽く言えるような金額じゃない。

詩は自分で稼ぎたい。おソノさんの話を受けたのも、金額が大きすぎるとはいえ、その対価として詩がやることがあったからだ。

一ヶ月、孫の結婚相手候補として接する。

そのときは孫娘だと思っていたけれど、それでも、いいですよ、とうなずいた。約束したことは守る。

ここからいなくなるだけで二億とか、そういった稼ぎ方はいやだ。本能の部分でいやだ。

ただ逃げればいいなんて楽じゃね？ と思わないといえは嘘になる。でも、いやだ。本当にいやだ。

俺は頑固なんだ。

「あっそ」

友紀が肩をすくめた。

「まあ、おまえ、頑固そうだからな。半々で断られると思ってた。さて、そろそろ効いてくるころかな」

「何が？」

くらり、とめまいがした。ふらふらと体が揺れる。

…なんだ、これ。

「薬。コーヒーにあまり大きな声じゃ言えない薬を入れたんだ」

「おまえ…眠らせて、俺を放り出したとしても、絶対に戻ってくるからな…」

口もあんまり回らない。

「おソノさんに事情を説明して…もう一ヶ月…やらせてもらう…」

体から力が抜けてきた。

なんの薬だ…？

「そうだろうな。だから、絶対に戻ってきたくない方法で追い出す」

友紀が立ち上がって、詩のところまでやってきた。椅子にもたれかかっている詩を、ひょいと抱えあげる。

…え？ 決して体重が軽いわけじゃないのに、なぜ。

「物を運ぶにはうまくバランスが取れるところを抱えればいい。人の体もおんなじ。とはいえ、体に力が入ってないと重いな。ベッドが近くてよかった」

そのまま運ばれて、ベッドに横たえられた。

「結婚するんならセックスの相性がいいかどうかも重要だろ？」

友紀がにやりと笑う。

…冗談…だよな…？

「というわけで、セックスしようぜ。逃げて帰りたくなったら言え。すぐにやめてやる。俺に抱かれたくなかったら、さっさと降参するのがいいと思うぞ」

「ふざけんな…っ…！」

「ふざけてない。すげー本気。俺、遊び人だって知ってるよな？」

友紀が目を細めた。

「男も女もいけんの。これも経験だと思って、いろんな遊び方してきたから。男でもない女でもない、でもいける。セックスだけなら、だれでも大丈夫。おまえでも全然平気。むしろ楽しみ」

友紀が詩の服を脱がしていく。

「さあ、楽しもうぜ」

友紀は本気だ。それがわかる。

飲まされたのは体になんらかの変化をもたらす薬だということもわかってきた。

だって、体が熱い。奥から、ずくん、ずくん、と何かがわきあがってくる。

わかった！ 逃げる！ 二度とここには来ない！

そう言えば許されるのもわかっている。

だけど、言いたくない。

喧嘩はすべて買うと決めている。

男ともするというのは嘘かもしれない。おソノさんとの会話を聞いていても、女好きな印象しかない。

そこに賭ける。

白旗なんて絶対にあげない。

「んっ…ふっ…」

キスをされて、詩は顔をそらそうとした。だけど、あごをつかまれて離してもらえない。

まさか、はじめてのキスがこんなだなんて。

友紀の唇は少し乾いていて、それなのに当たるとやわらかい。

人の唇ってこんな感触なんだ。

詩はぼんやりとそう考える。

自分の中にある気持ちなのに他人のものみたいな、おかしい感覚。まるで心がどこかにいってしまったかのようだ。

友紀の舌が唇の中に割りこんできた。それも避けたいのにどうにもならない。自分の体が自分のものじゃない。

卑怯だ、と思う。

薬を使って思いどおりにするなんて。

だけど、逃げない、と決めたのは自分で。友紀は詩を追い払いたいからてっとり早くいやがら

せをしているだけ。

このあと、きっとどこかで友紀は | 躡《ちゅう》 | 踏《ちょ》する。男の自分とセックスすることをためらう瞬間がくる。

そこを見逃さずに、もうやめよう、と穏やかに説得するしかない。言い争ったり、喧嘩したり、じゃなくて、穏やかに。そんなに言うならつづけてやるよ！ と逆ギレされないように。

それがどこなのか、慎重に見極めることが大事。だから、いまはおとなしくしておく。体力も気力も、そのときに必要になる。

舌を絡められて、こすられて。

「んんっ…」

また声が | 漏《も》れた。

無意識に友紀を押し返そうと、トン、と胸を押すのに、まったく離れていかない。手に力が入らない。

これは、きっと薬のせい。キスで力が抜けたわけじゃない。

友紀の舌はまるで生き物のように | 這《は》いまわり、詩の | 口《こう》 | 腔《こう》内を犯していく。ちゅくちゅくと音がして、唾液が絡まるのがわかる。

| 上《うわ》 | 顎《あご》をくすぐられて、びくん、と体が跳ねた。友紀はそこを執拗にいじってくる。

びくん、びくん、びくん。

そのたびに体が跳ねる。

また舌に戻ってきて、舌先を撫でられた。ちろちろと動く友紀の舌に | 翻《ほん》 | 弄《ろう》されている。

こんなに舌って自由自在に動くんだ。

なんの経験もない詩には、それが不思議でしようがない。

友紀の舌が抜かれた。つーっと唾液が糸を引くのが見える。

「どうだ？」

友紀が目を細めた。

「帰りたくならないか？」

「なら…ない…っ…」

普通にしゃべりたかったのに息が切れてしまった。それは悔しいけれど、友紀のキスが特別うまいのだと思い込むことにする。

これから先も、きっと挑発はされる。それにいちいち乗ってたらしようがない。受け流さないで。

「ふーん。意地っ張りなんだか、負けずぎらいなんだか、ただのバカなんだかわかんないけどさ、自分をもっと大事にした方がいいぞ。初対面の男に抱かれるなんて屈辱以外のなにものでもないだろ」

おまえが言うな！

そう怒鳴りたくなるのを、ぐっところえる。

穏やかに、穏やかに。喧嘩腰にはならない。そうじゃないと、説得できるものもできなくなる。

負けずぎらいで喧嘩は買う主義だからこそ、勝てない喧嘩はしたくない。怒鳴りあえばいいつてもものじゃないのだ。

「じゃあ、大事にさせてくれるんだな？」

「どういう意味だ？」

「ここでやめよう。それがおたがいのためだ。一ヶ月の間、一日一時間だけ仲良くおしゃべりすればいいんだよ。その一ヶ月を我慢すれば、俺もおまえも幸せになれる。だろ？」

その一ヶ月でどうにか俺にメロメロにして最終日にこっぴどくふってやる、という計画はいまだにあきらめていないけれども、それが無理だったとしても、バイト代がもらえて就職先もある。勝ち負けでいえば引き分けぐらい。それなら、まだ我慢できる。

「だから、一ヶ月も家の中にこもってるなんてごめんだ、つってんの。いまなら二億の提案はまだ有効だぞ。どうする？」

「いやだ」

おソノさんと約束したし、二億もらって逃げるなんて自分らしくない。

友紀だって、結局は脅して詩を逃げさせたいのだ。セックスをしたいわけじゃなくて、これも脅しの道具のひとつ。

詩の読みが正しかった。だったら、このままやらせておけばいい。そのうち、友紀の方からやめる。

「そんなにセックスがしたいならすればいい」

あ、これは挑発行為だ。やりすぎた。

そう思った瞬間、友紀の目がきらりと光った。

…やっぱりな。

詩はため息をつきそうになる。

穏やかに、って自分に言い聞かせてたのに、負けずぎらいが出てしまった。

「やるよ。後悔すんなよ」

友紀の手が詩の胸に当てられる。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>